九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ゴティック古典様式カテドラルの成立とその背景 : Chartres, Reims, Amiens を中心として（下の一）

森, 洋

https://doi.org/10.15017/2244519

出版情報：史淵. 94, pp.1-32, 1965-03-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ゴティック古典様式カテドラルの成立とその背景

——Chartres, Reims, Amiens を中心として——（下の一）

森　洋

四、建設資金

古典様式カテドラル群を成立せしめた諸環境とカペー王権とを結ぶ諸関係の検討に入るに先立つて、我々は、これらのカテドラルを建設するに要した資金の出処について一瞥を加える必要がある。疑いもなく、天文学的な数字に達したに相違ないこれらの資金を、誰が、如何なる方法で調達したかを、一応決定することによつて、我々は、前章にのべた capitulum が、これらの建設において荷つたかもしれぬ役割をより具体的に知り得ると共に、推定される関係者グループのうちの誰をインデックスとして、王権との関係を考察すべきかを決定する予備的作業ともなし得ると考えるからである。

前章までの諸考察がすでに明らかにしているように、他のあらゆるカテドラル建設関係の直接史料が極めて乏しいのと同様に、その経済関係の史料も、殆んど皆無に近い。唯一の例外は、Autun のカテドラル Saint-Lazare における十三世紀末の——恐らくは飛梁付加の——工事に際して、《provisieur》(provisor) Robert Clavel が、一二九四—一二九五会計年度について、capitulum に提出した収支報告書一通のみである。[1] 時期は大分ずれるが、Quicherat によつて分析された本報告の収入 (recettes) を一応表示し、それを手がかりにして我々は以下の考察を進めたいと思う。

	項　　目	金　　額
1.	Autun の capitulum に対する賦課金。	〔354£. 13 s. 2 d.〕
2.	都市及び教区内における空位 bénéfices からの収入で，教皇の許可により，当該カテドラルの工事にあてらるべきもの。	
3.	工事献金者（bienfaiteurs）に認められた indulgentia の収入。	
4.	ペンテコステのsynodeに際しての募金（quête）及び Saint-Lazare の confrérie からの収入。	
5.	臨時収入(2)。	34£. 19 s. 5 d.
6.	工事特別会計のための募金箱からの収入(3)。	10£. 17 s. 2 d.
7.	Autun のカテドラルにおいて1294年のペンテコステから，1295年のペンテコステまでに鋳造された deniers から本会計にもたらされた予備控除額に対する附加項目。	42£. 13 s. 3 d.
	最終項（第7項）を除く合計	400£. 9 s. 9 d.

この表の数字中、与えられているものは第5～第7項の金額と合計のみである。そして収入合計は第7項を除いて――この控除の理由は後で考察する――400£. 9s. 9d. であるから、第5、6項の金額をこれから差引いた数字が第1～第4項に当たる。この収入に対して、計上している支出は 290£. 2s. 8d. であるから、(4) その差額 110£. 7s. 1d. 及び、前表第7項目が説明されねばならず、事実その説明は、報告書前文に与えられているように思われる。

「一二九五年、ペンテコステノ八日間ノ大祝日後ノ金曜日ニ、clerc ニシテ、Saint-Lazare ノ Chapitre ノ proviseur タル Robert Clavel ハ、上記 Chapitre ノ名ニオイテ一二九四年ペンテコステノ八日間ノ大祝日後ノ月曜日カラ、上記一二九五年ペンテコステノ八日間ノ大祝日中ノ主日マデニ、ナサレタル全費用（支出）ト収入ノ会計（compte）ヲ行ツタ。obole[a] トシテ 12£. 11d. ノ控除ヲ行イ、〔更ニ〕当該支出ニアテラルベク受ケタ予納金(avances)ヲ忘レルコトナク控除スレバ、Autun ノ Chapitre ガ上記 Robert ニ対シテ負ウテイル 53£. 6s. 3d. ガ残リ、〔ソノ〕額ハ、上記 Robert ガ、上記〔一二九四年ペンテコステノ八日間ノ大祝日後ノ〕月曜日ニナサレタ会計後ニ、Autun ノ Chapitre ニ対シテ負ウテイタモノデアル。[5]」

以上のうち、「当該支出ニアテラルベク受ケタ予納金」とは、前表第7項に該当するものと考えられよう。最後の53£. 6s. 3d. は、前年度欠損額であり、一応 Robert が自費で補充していたものを、当年度収入から、Chapitre が返済したものとは考えられないであろうか。こうして全会計からの控除額は、12£. 11d. ＋42£. 13s. 3d. ＋53£. 6s. 3d. ＝108£. 6d. となり、2£. 6s. 8d. の誤差をもつて、収支はバランスがとれることになる。

この前文から、工事費用がすべて司教座聖堂参事会の責任下におかれることが、十三世紀を通じて一般的な現象であつたと結論ずけることは不可能である。何となれば、第一にこの会計報告は、カテドラル建設のそれではなく、部分補修、即ち維持工事のそれである。第二に、本会計は、唯一年度に関して「司教座聖堂参事会ノ名ニオイテ行ワレタ」収支のみに関して、同参事会が、参事会員外の、恐らくは計理専門家に委託して行わせたものである。[6] むしろ此処で注目せねばならぬのは、この例外的にバランスのとれた収支においても、尚収入の大部分である 354£. 13s. 2d. が、第1項から第4項までの収入に属していると云う事実であろう。

これら四項目の収入は、第5、第6項のそれと同様に、決して恒常的なものではない。そのことには、それらの項目

を、先ずvon Simsonが綿密に考察したChartresの場合[7]と比較することによつて、多少の具体性を賦与し得るであろう。

一一九四年の火災後、率先して、又最も熱心にChartresのカテドラルの再建を説いたのは、教皇使節であつたカルディナルMelior de Piseであつた。彼はまず司教Renaud de Mouçonと、彼が改革を終えたばかりの[8]chapitreを説いて、司教とchanoinesの収入の、生計費を除く大部分を、三年間その目的に献げると云う決議を行わせた。当時最も強力で富裕なChapitreとして令名の高かつたChartresのそれの収入は[9]、さしあたつて建設を開始するに充分であつたと思われるが、更にそれに加えて、空位bénéficesの収入を、数年間を限り、工事にむける決定も行われた模様である。[10]以上の如くして前表第1、第2項に該当する収入は、Chartresでも存在した訳であるが、その何れもが、三年間、或は数年間と時間を限られていた。従つて、これらが如何に巨額であろうとも、この収入のみが半世紀をこえる大工事のすべてをまかない得ぬことは言を俟たない。事実経済的危機は三年をすぎた頃におとずれ、その後は、前表第4項に該当する収入に、主として頼らねばならなかつたであろう。第3項のindulgentiaの収入については、Chartresには確証がないが、この項目が第4項と区別し得るか否かについては問題が残るであろう。[11]

第4項の募金（quête）に属する収入を得る方法は、大別して二つあつた。第一の方法は、Melior自身が行つた如く、呼びかけによつて一時の、そして比較的大口の献金を得るか、或は「講」を作らせて、継続的な献金の予約、或は労働力の提供を行わしめる方法である。[12]この方法は、特にChartresにおいては、その教会の特殊な地位の故に成功した。此処で「講」が如何なる成果を挙げ得たかは、すでに前（第二章）に述べた。各地から蝟進する巡礼者も亦、経済・労力の両面にわたつて、何らかを提供したであろう。それらにも増して、王以下の諸侯や、当時は富裕であつたChartresのcorporationsが行つた献金が如何なるものであつたかを、今日残るガラス絵群が何よりも雄弁に物語つている。[13]高窓列及び祭室部廻廊放射状祭室のガラス絵には、主としてそれぞれ聖俗諸侯が紋章（blasons）やその姿を残している。[14]身廊部側廊

のガラス絵には、その他の部分と同様、それぞれ下部に、職業組合の活動を示す小図がはめこまれている。[15] そして、それら両空間をつなぐ袖廊部の南北両バラ窓部は、南（1217〜1221作製）は王の一家に属する comte de Dreux, duc de Bretagne の Pierre Mauclerc、その妻 Alix 及びその娘 Yolande がその姿をとどめ、[16] 北のそれ（1224〜1236）は、フランス王 Saint-Louis の紋章（Fleur de Lys）と、母后にして摂政である Blanche de Castille の紋章（城）とをかざっている。[17] これらのガラス絵は、それぞれその紋章・人像や、職業活動図によって示された諸侯又は組合の奉献によったのである。

第二の方法は聖遺物によるものである。この方法は、いわば最も古典的なものであり、例えば、一一一二年の Laon の聖遺物巡行団の例等[18]が、これが十二世紀以前の最も一般的な募金法であったことを暗示している。Chartres においては、「聖母の肌着」の令名は余りにも高く、これが巡礼者を絶えずひきつけていた事はすでに述べたが、[19] 一一九四年から三年間の司教及び司教座聖堂参事会員の献金が終って財源に危機がおとずれた際に、参事会員がまずとった対策は、これの巡行であった。[20] 更に Louis, comte de Chartres は「Sainte Anne の頭」を購入して、これをカテドラルに送ったが、[21] この聖遺物も亦、相当な収入源となった事であろう。しかしこの最後の方法は、聖遺物そのものの真偽、奇蹟、或はそれに伴なって行く説教者等に関して、極めて問題が生じやすいものである。事実一二一五年の Lateran 公会議（Concilium Lateranense IV. Generale）は、このことに関して、次の如き決定を下した。

「何者カガ諸聖人ノ遺物ヲ売リ立テニ出シ、或ハソレラヲ其処此処デ見セ物ニスルコトニヨツテ、余リニシバシバキリスト教ノ〔名誉ガ〕傷ツケラレテイルトコロカラ、慈今〔同様ノ不名誉ヲ〕蒙ラザランガタメニ、本命令（decretum）ヲモツテ次ノ如ク定メル。古来ノ〔聖〕遺物ハ、決シテ聖遺物匣（capsa）外ニ出サザルベク、売立テニ出サザルコト。而シテ新タニ発見サレタル〔聖遺物〕ハ、マズ Roma 教皇ノ権威ニヨツテ承認セラレタルニ非ザレバ、何人モ〔コレヲ〕公ケニ崇敬〔ノ対象ト〕スベク試ミザルコト。

ヨツテ高位聖職者タチ（praelati）ハソノ他ニモ、多クノ場所デ、オリニフレテ慣行サレタルガ如キ、空シイ嘘言ヤ、偽造文書ニアザムカレテ、〔聖遺物〕尊崇ノ件デ彼ラノ教会ニ来ツタモノタチヲ、許シテハナラナイ。又奉献の募集者たち（eleemosynarum quaestores）も、その説教の中で他をあざむくことにより、何らかの悪弊を及ぼすによつて、教皇又は教区司教の真正の書簡を提示せぬ限り、許可することを禁止する。又その際に、同上書簡にもらるべき〔内容〕については、一切〔教区〕民（populus）に示すことは許されない。....」[22]

この決定は明らかに聖遺物の巡行による募金法に致命傷を与えるものである。しかし一挙にこの方法を消滅させたとは考えられない。何となれば、Decretalium Gregorii IX がこの canon を収録した際に、前掲拙訳では片仮名で記した前半部を除去し、平仮名で記した後半部のみを、本 canon の後半部である indulgentia に関する決定と結びつけているからである。[23] 又このことは、恐らくは聖遺物による募金と、indulgentia によるそれとが、一二一五年頃には不可分に結びついて考えられていた事、或はその後聖遺物による方法が漸次その重要性を失つて行つた事等を示しているであろう。これらの推定は重要な意味をもつ。何となれば恐らくは同様の諸方法で資金を調達したであろう Reims や Amiens[24] についてみれば、前者の工事開始は一二一一年、後者は一二二〇年であるからである。而して事実 Reims については、indulgentia が紛争の種となつた。

Reims におけるこの種の問題が如何なるものであつたかを知る、最も明瞭な手がかりは、一二四六年四月に出された教皇 Innocentius IV の《Constitutiones et decretum》（《Romana ecclesia que》）[25] の前文によつて提供される。この前文は、Varin によつて始めて復原されたものであるが、[26] その結果が Liber Sextus Decretalium に10 canones を提供するにいたる、[27] Reims 大司教と Soissons や Châlons-sur-Marne 等の属司教たちとの紛争の経緯を記述しながら次のように述べている。

「更ニ Reims ノ教会ノ建設ノタメニアテラレル募金者 (questores) ニツイテモ、ソレラ属司教ノ教区民 (subditi) ヲ、彼ラガ募金者ヲ妨害シタトカ、或ハ〔彼ラニ〕従オウト欲シナイトカ云イタテテ、彼ラノ officiales ノ前ニ出頭スベク召喚スルコトニヨリ、〔属司教ノ〕権限 (potertas) ヲ損ネテイル。…同上大司教ハ更ニ、重荷ニ重荷ヲ加エ、従順ノ聖徳ノ〔名〕ニオイテ、新タニソノ属司教タチニ次ノ如ク命ジタ。即チ彼〔大司教〕ノモトカラ上記工事ノタメニ派遣サレタ募金者ヲ誠実ニムカエイレテ、平和ナ期待ヲモツテ、〔属司教ノ〕教区民ニ、彼ラガ上記教会ノ件ヲノベルコトヲ許スヨウニ。又更ニツケ加エテ〔属司教〕自身マズ手ハジメニ、彼ニ神カラ与エラレタ財産カラ、同上教会建設工事ノタメニ、鷹揚ナル献金ヲ行ウコト。又彼〔大司教〕ノ告示ニテ命ゼラレタル所ト、同上属司教タチノ意図トヲ、カレラノ教区民タチニ行キワタラシメ、モツテ彼ラガ当該教会ノタメノ寄金者ノ講 (confreria benefactorum) ニ従イ、ソノ講中 (confratri) ハ各自ソノ財産能力ニ応ジテ、毎年〔一度〕一定額ノ金銭又ハ収獲物ヲモツテ、同上教会ヲ訪レル〔ヨウニスル〕コト。更ニ同上募金者ノ到着ニ際シテハ、〔タトエソレガ〕平日〔デアロウト、一日ヲ〕正式ニ指定シテ (feriis indictis solemnibus)、祝祭ヲ行ナイ、且コレラ募金者ノ前ニ呼ビ集メラレタ上記教区民ハ、主日ニオケルガ如クニ、彼ラ (募金者) カラ許可ヲ得〔ザル〕限り、労働セント試ミザランコトヲ。又上記教会ノ使者 (nuncii＝募金者) ハ他ノ募金者ニ優先セシメラルベク、彼ラガ受イレラレタル週間ニハ、如何ナル他ノ使者ヲモ許可セザルコト。彼〔大司教〕ハ更ニソノ provincia ヲ通ジテ、同上建設ニ寄与シタモノ (benefactores) ニ、一年間ノ贖宥 (indulgentia) ヲ与エ、総公会議ノ決定 (statuta concilii generalis) ヲコエテ、ソノ上誓願違反ヤ、肉親ヘノ攻撃ノ罪アルモノニモ、贖罪ノ赦シ (remissiones) ヲ与エタ。…」[28]

以上の引用を、一部で行われているように[29]、Reims の provincia があげてそのカテドラル建設をたすけた事実を示すものと解釈することは不可能である。一見して明らかなように、この部分のみならず、この bulla の前文全体は、この時期

のReimsの大司教やofficialité、更にそれらの威をかりて横車をおす募金者たちに対する怨嗟の声に満ちている。内容上、上掲の引用文は二部分に分れている。即ち第一に募金者の目にあまる横行であり、その行為は、大司教とofficialesの――裁判権に基ずく――脅迫によって裏ずけされている。第二は大司教によるindulgentiaやremissionesの濫発であり、これも教会裁判による罪の宣告をまって、始めて有効な手段たり得るものである。事実上掲のbullaは、Reimsのprovinciaにおける、大司教と属司教との間の裁判権をめぐる諸問題の解決を目的としていたのである。[30]

紛争の内容は、長文の前文中にも縷述されているが、これを別としても、Reimsの諸裁判権がこの時期に如何なる行動をとつていたかは、ReimsのSaint-Remi修道院をめぐる一連の教皇文書から明らかになる。Innocentius IVは、一二四四年一月七日にSaint-Remiに対して「‥‥我ガ先任者タチニヨッテ汝ラト汝ラノ修道院ニ対シテ賦与シタindulgentiaeヤprivilegiaノウチ、ソノアルモノノ行使ハ怠慢ノタメニ従来ハナオザリニサレテイタガ、‥‥コレラprivilegiaヤindulgentiaガ、裁判（judicium）ヤ他ノ場所デ、自由ニ行使サレルコトヲ‥‥認メル（indulgemus）‥‥」と云うprivilegia[31]を与えた。これは、次にのべる一連のbullaeに対する前提条件を確立したものである。即ち同年二月九日のprivilegiumは次の如く云う。

「‥‥アル種ノ教会高位聖職者タチヤ、彼ラノofficialesガ、俗件ニツイテ、ソノ裁判権（cognitio）ガ彼ラニデハナク、汝ラニ属シテイルコト明ラカデアル、汝ラノ修道院ノhominesヲ、法的ニハ不可能ナルニヨッテ、最大限ニ〔既成〕事実〔ヲ作ルコト〕ニヨリ、汝ラノ権利ヲ侵害シテ裁カントシテイル。俗人ハ俗件ニツイテハ彼ラ〔俗人〕ノ面前ニオケルソノ裁判デ裁カレ、彼ラ〔高位聖職者ヤソノofficiales〕ニ裁判権ガ〔属シテイルト〕認メガタク、〔従ッテ〕上訴（appellationes）ヤソノ他正当ナ手段ニヨル例外〔ヲノゾケバ、〕彼ラ〔聖職者〕ノ吟味カラハ遠ザケラレテイルノヲ常トスルガ、彼ラハ彼〔俗人〕ニ、事前ニ欠席ノママ破門宣告（excommunicationis sententia）ヲ下ス。ソノ

解除ノタメニ、モシ〔ソノ俗人ガ〕富裕ナラバ、九リーブル・二デナリウスヲ、他カラハ他ノ額ノ金銭ヲ、正義ニ反シテ、償イノ名目デ（emende nomine）ダマシトル。....」[32]

その二日後、二月十一日の privilegium も、同一内容を、更に激しい表現で繰返した。

「...アル種ノ教会高位聖職者タチ、更ニ彼ラノ officiales ハ、盲目的ナ貪欲ニ誘ワレテ、又ソノ吝嗇サニ節度ヲ加エズ、汝ラノ修道院ノ homines ヤ mansionarii カラダマシトル機会ヲモツタメニ、シバシバ彼ラヲ破門シ、マズ一定額ノ金銭ガ償イノ名目デ彼ラニ支払ワレヌ限リ、ソウシタ宣告ヲ解除シヨウト欲シナイ。モシタマタマコレラ〔ノ宣告〕ヲ解除シタニシテモ、〔実状ハ〕程遠ク、同様ノ金銭ヲ支払ワネバ、ソレニツイテ旧イ慣習法（antiqua consuetudo）ヲ主張シテ、同様ノ宣告ニ引キモドス。コレコソ真ニ腐敗ト云イ得ルデアロウ。....」[33]

先に挙げた一月七日の privilegium も、一月九日、同十一日のそれも、何れもこうした侵害行為から Saint-Remi を守るための空しい措置であつた。更に一二四五年一月十八日の同修道院宛の privilegium は、事情が一向に変つていない事を物語つている。

「...汝ラノ修道院ノ homines ヤ mansionarii、或ハソノ他ノモノガ、汝ラノ法廷(forum)ニ属シテイル〔ニモカカワラズ〕、汝ラヤ、汝ラノ prepositus ヤ justicarii ノ面前デ、越権ニヨリ、又〔Reims ノ〕教会法廷ニ属シテハイナイ正当ナ諸件ニヨリ、集メラレ、〔カレラヲ〕汝ラノ裁判カラ遠ザケ、裁判権（jurisdictio）ヲ破壊センガタメニ、ソノ地ノ正規教会裁判官（judices ordinarii）ノモトニ上訴スル〔コトヲ強イラレルガ如キ事態〕ガ、シバシバ生ジテイル。コレラノ上訴裁判権（appellationes）ハ、タトエ些事ニ〔関シテデ〕アロウトモ、無差別ニ同上修道院ノ権利ヲオカシテ、汝ラヤ、汝ラノ上記 prepositi ヤ judicarii ニ適用サレ、モシソノ上訴ニ対シテ汝ラガ反対ノ行動デモスレバ、コレラニ対シテ何等ノ裁判権ヲモ有スルトハ認メラレテイナイニモカカワラズ、ヒタスラ、真ニ腐敗ト呼バレ得ベキ慣習法

ヲ主張シテ、聖務禁止（interdictum）、聖務停止（suspensio）、或ハ破門（excommunicatio）ノ宣告ヲ下ス。‥‥」[31]

これらの史料から、Reims の裁判権をめぐって、明瞭な像が浮かび上ってくる。即ち此処には「アル種ノ高位聖職者タチ（prelati）ト、ソノ officiales」及び「教会ノ正規裁判官」が登場する。彼らは、全 provincia を通じて、appellatio の名のもとに、俗人に対しても「些事」にいたるまで、事実上の第一審裁判権を行使し、しかも破門宣告を濫発し、それを阻止しようとした正当な裁判官に対しても同様な報復手段をとることを躊躇しない。これらの宣告をとくについては、「償イノ名目デ」金銭が強要される。そしてこれらすべての事柄は「旧イ慣習法」の名のもとに強行される。カテドラル建設のための募金者たちは、こうした背景のもとに活躍していたのである。

此処にいたれば、問題が、これら募金者そのものにあるのではなく、むしろ Reims の裁判権の構造、及びその行使法にあることは明らかである。一二四六年の《Romana ecclesia》の中心問題も、構造の面では、officialités であり、行使の面では、appellatio であると云えよう。excommunicatio 及びその「償イ」の問題は、それらの結果生じるものであって、又この「償イ」とは、恐らくは indulgentia 又は remissio を指しているのであろう。そして Reims の大司教側は、その行使面での非難に次のような弁明を試みている。

「‥‥Reims ノ〔大司教〕法廷（curia remensis）ハ、法又ハ consuetudo ニヨツテ彼〔大司教〕ニ許サレタルガ如クニ、ソノ provincia 属司教ヤ archidiaconi ヤ他ノ高位聖職者タチノ投ゲカケル appellationes ヲ受ケテ、ソレラヲ裁ク。カク〔appellationes ヲ〕受ケテ〔ソレラヲ〕裁クコトハ、ソレニツイテ記憶ノ存シナイ時カラ、アタカモ所有セル〔権限〕ノ如クニ（in quasi possessione）〔存シテキタ〕。カカル consuetudo ハ Reims 教会ニ特別ノモノデハナク、スベテノ Gallia ノ首都大司教ニ〔存シタモノデアル。〕‥‥」

「‥‥コレラReims 教会ノ officiales ガ、反対側ガ主張スルゴトク、募金者タチニ召喚ノ権限ヲ依託シタコトハナ

イ。Reims 教会ノ建設工事ノタメニ、神カラ授ケラレタ財物〔ノ一部〕ヲ喜捨シ、講ヲ作リ、ソノ他同上工事ガ必要トスル消耗品ヲ分ツヨウニ、属司教ヤソノ教区民ニ命ジ誘ナウコトハ、法ヤ平衡 (equitas) ニヨリ、或ハ同上教会ノ consuetudo ニヨッテ、彼〔大司教〕ニ許サレテイル。‥‥」

「‥‥更に Reims ノ officiales ハ、最モ重大ナ事件ニモ、最大ノ熟慮ヲ重ネ、心ニ多クノ悩ミヲヒメテ、ソノ属司教ノ聖務ヲ禁止シ、〔彼ヲ〕破門シ、又〔ソノ聖務ヲ〕停止シテイル。‥‥」[35]

以上を通観して二、三の事実が明らかになる。第一に直接建設資金の調達にかかわる事項、即ちそのための献金の要請、講の結成その他は、大司教のイニシアテイヴと責任において行われたと云う点について、両者の主張は一致している。第二に、大司教側の反論は一般論であって、決して Saint-Remi 関係の諸教皇文書が述べているような、末端での諸活動諸結果を正当化してはいない。第三にこうした裁判制度上の混乱の原因が、十三世紀においては少なくとも制度として明瞭に把握出来ない、officiales によって構成される officialité (officialium) なる存在にあったであろう点に注目すべきである。officialité とは、[36]《Romana ecclesia》の *De appellatione* (VI decret. lib. II. tit. XV. c. III) が与えた定義によれば、「一般ニ彼ラ（司教タチ）ノ法廷ニ属スル諸件ニツキ、彼ラ（司教タチ）ノ代理ヲツトメルコトニヨッテ〔コレラヲ〕裁キ、一ツニシテ同体ノ補佐機官又ハ諮問機官〔ヲソレゾレノ司教タチト形成シテイルモノ〕」[37]である。従って初期には司教の裁判権そのものの代行者であって、それ自体の権限はない。Reims の場合、大司教自身のためにこれを組織したのは、Guillaume de Champagne であり、間もなく、同様のものを Reims の大小二 archidiaconi が併せもつことになった。これら archidiaconi の officialités 特に大 archidiaconus. のそれは、ほぼ同 provincia の属司教のそれらと同等の地歩を占めていた。[38] Saint-Remi 関係の教皇文書に云う「アル種ノ教会高位聖職者トソノ officiales」とは、明らかに Reims の大司教と二 archidiaconi 及びそのそれぞれの officiales であった。大司教の curia の周辺の三

officialités に加えて、その属司教たちのそれらが、明確な権限なしに、競合しあう時、其処に予想される混乱は、その責任を大司教側にのみ帰し得ぬ性格のものではなかったであろう。これら officialités の権限の調整は、上記《Romana ecclesia》で、始めて明文化されたものであり、しかもそれのみでは当事者を調停し得なかったので、Albano の司教 Petrus を調停者にむかえ、[39] その Sententia、[40] と更にそれに対する教皇の確認[41]とをまつて、漸くこの係争を終結せしめた。

この間の事情は、此処では appellatio と excommunicatio の二点のみをとりあげて、《Romana ecclesia》と、それに対する《Sententia》の註解を一瞥するに止めたい。第一の appellatio に関して、《Romana ecclesia》の *De appellatione* はかく云う。

「…Archidiaconus ヤ、コレラ属司教ニ下属スル他ノ〔ヨリ低イ〕高位聖職者ヤ、ソノ officiales カラハ、各自ノ属司教ニ上訴サルベキデアツテ、上記ノ属司教ヲハブイテ、〔直接〕同上（Reims ノ）法廷ニ上訴サルベキデハナイ。〔但シ〕以上ニツキ Reims 教会が consuetudo ニヨリ、権限ヲ有シテイルモノヲ除ク。[42]」

この部分に関する Sententia の註解は、第一に、属司教の裁判権を第二審裁判、officiales 等のそれを第一審裁判とみなす点に特徴がある。[43] 第二にこの註解は、Reims 教会法廷に直接上訴し得る件とし得ない件とを詳述しながら、当然問題となり得る consuetudo の語を避けて、一種の法理論の色彩を与えようとしている。即ち、民事にしろ、刑事にしろ、結審に急を要するものは、直接最終審（sententia deffinitiva）、即ち大司教法廷に上訴し得ない。しかし民事でも、「近親ノ故ノ婚姻解消」（de disjungendo matrimonio propler parentelam）と云つた、急を要しない件や、霊的な諸件は、直接「Reims ノ法廷ニ」（ad remensem curiam）上訴し得る。但し中級審をとびこえる際には、何れの場合にも、「係争ガ紛糾シ、且偽証或ハ真実ヲ述ベタコトニツイテノ宣誓ガナサレタ後」（post litis contestacionem, et juramentum de calumpnia sive de veritate dicenda prestitum）でなければならない。[44] 卑見によれば、この最後の条件は、宣誓の効力その

ものが問われるからであろう。しかしこの決定によつて、Reims 側がその provincia 中に、上訴を受けた形式をとつて、裁判権を侵透させる途はふさがれた。そしてこの制限は、Romana ecclesia の *De officio ordinarii* (VI decret. lib.I. tit.XVI, c.I, et §.1.) において、大司教が、その属司教たちの司教区内に、管外 officiales (officiales foranei) を設置する事を禁止する規定[45]によつて裏ずけされている。そして恐らくはその反対給付として、Sententia は、Reims 法廷の裁治権 (jurisdictio curie remensis) を損なうが如き「新タナ中級審」(nova media) の設立を禁止した。[46]

次に破門 (excommunicatio)、聖務停止 (suspensio)、聖務禁止 (interdictus) について、Romana ecclesia は二ケ所でふれている。第一は *De officio ordinarii* の末尾で、次の如く云う。

「Reims 大司教ノ officiales ハ、ソノ provincia 内デアロウト、乃至ハコレヲコエテ、ソノ属司教ニ対シテ、聖務禁止、聖務停止、将又破門ノ宣告ヲ下ソウト試ミルベキデハナイ。又コノコトハ、他ノ首都大司教ノ officiales ガソノ属司教ニ対シテモ同様ニ……遵守サルベク命ズル。[47]」

更に *De sententia excommunicationis* (VI decret. lib. V. tit.XI. c.V.) は次の如く云う。

「archidiaconi ノ officiales ヤ、或ハソノ他何人デアロウトモ、Reims 教会ニ属シテ、属司教ノ裁治権ヲモツモノニヨツテ下サレタ聖務禁止、聖務停止、或ハ破門ノ宣告ハ、当該破門宣告者ヲノゾイテ、Reims 大司教ヤソノ officiales ガ解除シテハナラナイ。但シコノコトニツキ consuetutudo ガモシアリトセバ、コレニ反シタ場合ヲ除ク。……」[48]

後者のみについて Sententia は次の如き註解を付している。

「……〔次ノ如ク〕述べ且命ズル。同上ノ宣告ハ、〔再〕審サレタ上デ、ソノ件ヲ担当スベキ裁判権ニヨツテデナケレバ、解除シ、或ハ解除サルベク要求サレテハナラナイ。[49]」

こうして、Reims 大司教にとつて、その破門宣告権及び解除権は、大司教の司教区にしか及ばなくなり、又その大小

archidiaconi のそれらとも抵触することになつた。

先にのべた如く、これら一連の問題は、大司教周辺の裁判権濫用をめぐつて起つた。そしてその濫用は、管轄の侵犯に一原因があつた事は明らかであり、上述の諸決定は一応その問題を解決しようとした。但し大司教の officiales と大小 archidiaconi のそれとの調整は未だ充分には行われていない。次の問題は破門宣告の濫発と、その解除を口実とする金銭略取の問題であるが、これも亦、一応上記決定によつて途を閉ざされた。こうした一連の現象は、勿論教会裁判権整備過程の――そして殆んど奇蹟的に俗権裁判権の介入が見られない――一例とも見られるであろうが、特に Reims を選んでこれらの醜聞が生じたことは、カテドラル建設と全く無関係であつたとは考えられない。この点は、同じく Romana ecclesia の *De Penitentiis et remissionibus* (VI decret. lib. V. tit. X. c. I.) が立証する。

「Reims ノ大司教ヤ、或ハソノ officiales〔ヲシテ〕、同上教会ノ属司教ノ教区民ヲ、Reims 教会建設ノタメノ募金者タチガ、彼ラ（教区民）が募金者タチニ抵抗スルトカ、従ウコトヲ欲シナイトカ云イタテテ、教区民ヲコノコトノ故ニ彼ラ（大司教或ハ officiales）ノ前ニ出頭スベク召喚セシメル権限ハ、彼ラ（募金者）ニ絶対ニ賦与サレテハイナイ。同上建設ノタメノ献金ノ受領ヤ補助ニ関シテハ、コレラ属司教ヤ Reims ノ Provincia ノ他ノキリスト教信者タチヲ、愛（caritas）ニヨツテコソ説得シ得ル。indulgentiae ヲ賦与スル際ニモ、Reims 大司教ハ総公会議ノ決定ヲ越エテハナラナイ。[50]」

かくて、裁判管轄侵犯、破門濫発、indulgentia は、少くとも Lyon 総公会議の当事者たちには、すべて募金の手段に結びつくものとして、同一次元でとらえられていたのである。

いわゆる Indulgentia は十字軍の時期にその従軍者に適用され、十二・十三世紀を通じて、次第にその教義、慣行を完成していつた。[51] 全贖宥（indulgentiae plenae）は此処では問題にならないが、分贖宥（indulgentiae partiales）について、

教会堂建設に関係のある規定は、Decretalium Gregorii IX におさめられた Alexander III (1161－1175) の bulla に見出される。

「汝 (Archiepiscopus Cantuariensi) ガ意見ヲ徴シ来リシ件、〔即チ〕教会ノ献堂〔ノ際〕ニ、或ハ橋ノ建設ニ合力セルモノニナサレタル remissiones ハ、[a] remissiones ヲ与エルモノ (remittentes) ニ属スルモノ (教区民) 以外ニモ適用シ得ル〔ヤ否〕ヤノ件ニツキ、汝ガ以下ノコトヲ厳ニ守ルコトヲ欲スル、即チ、当ノ裁判官ニヨリ結バレ或ハ解除セラレシコトノホカハ一切無効ナルニヨリ、上記 remissiones ヲ適用スル〔際〕ニハ、各自ノ裁判官 (判決者) ガ特ニ赦シヲ与エタ (indulserunt) モノ〔ナルヤ否ヤ〕ヲ判断シ、ソレラノモノニ〔ノミ〕適用スルコト。[52]」

此処では第一に、「教会献堂ノ際」の remissiones が認められていた事、しかし乍ら、第二にその適用は、罪の宣告を下した権威と同一の権威によってのみ行われ得ると云う、原則が確立されている。「教会献堂」とは、その意味が必ずしも明らかではないが、その際に建設に関する功労者への何等かの反対給付がその場で行われたと考えれば、当事者に相当自由な拡張解釈が可能になる。そして第二点は、remissiones 又は indulgentiae が募金者に手段として用いられることから生ずる濫用に対する予防策である。

先にかかげた――そして恐らくは Romana ecclesia が、「総公会議ノ決定」と呼んで典拠にした――一二一五年 Lateran 公会議の決定は次の如く云う。

「…更ニ、献金ヲツノルベク派遣サレタモノハ、質素デ且慎シミ深クアルベク、幕舎ヤソノ他適ワシカラヌ場所ニ泊ラズ、又無用ノ或ハ過度ノ費エヲナサザルコト。〔又〕スベテニツキ信仰ヲ過マル〔ガゴトキ〕態度〔ヲモッテ〕振舞ワヌヨウ、注意スベシ。

コレニ加エテ、教会高位聖職者ノアルモノガナスニ躊躇シナイ、indulgentiae ノ不謹慎〔ナ〕、過度〔ノ濫用〕ノ故

ニ、教会ノ鍵〔ノ権〕ハオカサレ、贖罪ノ痛悔ハ弱メラレテイル。〔ヨッテ〕我々ハ〔次ノヨウニ〕命ズル。即チ教会堂（basilica）ガ献ゲラレル際ニハ、ソレガ或ハ唯一ノ〔司教ニヨッテ献ゲラレヨウト〕、或ハ数人ノ司教ニヨッテ献ゲラレヨウト、indulgentia ハ一年ヲ越エザルコト。更ニ又献堂記念日ニ際シテハ、許サレル remissio ハ、課サレタル痛悔ノ四十日分ヲ越サザルコト。……」[53]

我々は此処でこうした一般的な禁止或は制限規定の背後にある現象を復原することが出来る。即ち「教会又ハ聖処ノタメノ募金者」が実は「傭ワレタ勧説者」（predicatores mercenarii）であること。そして彼らが、無許可で、或は裁治権の管轄を越えて、「説教ヲシタリ、告解ヲ聞イタリ、痛悔ヲ課シタリ、〔ソノ他〕同種ノコトヲナシタリ」した。これらの記述は、一二三一年に Saint-Quentin で行われた Reims 教会の provincia の公会議決定における禁止の対象であることに注目を要する。[54] しかしこうした現象は、総公会議の決定でまず禁止されている所からしても、一大司教区のみに留まる現象だつた筈はない。事実一二四六年 Bézier の公会議の決定も、次のように述べている。

「……報酬目アテノ、又請負イノ募金者タチガ、或ハ彼ラ自身ノ悪イ生活ヤ、或ハ僅少ノ金銭ニヨッテ、地獄デ却罰サレテイルモノノ解放ヲ約束シタリスル、誤リニ満チタ説教ニヨッテ、多クノ醜聞ヲ惹キ起シテイルコトハタシカデアルカラ。[55]」

こうした末端における濫用行為を抑制するための対策としては、かかる募金者たちに、教皇或は教区司教の書簡又は文書の携行を義務ずけ、そしてそれらの文面に彼らに許された行動や説教内容を明記することが定められてはいた。[56] ただし、これらの行為が、裁判権、破門権、贖宥授与権をもつと同時に、これら募金者にその許可を与える権威それ自身によつて、暗黙裡に奨励されていたとすれば事態は全く別になる。

我々は Reims のカテドラル建設資金の出所について、Reims をめぐる上述のスキャンダルが無関係ではなかつたので

はないか、その場合に怨嗟の的となつた officialités 当局者、即ち大司教と、大小 archidiaconi は、少なくともこの事を意識的に奨励又は黙認していたのではないかと云う疑いをもつ。何となれば、この件が落着して、こうした手をほぼ封じられた一二四八年から三年後の一二五一年三月六日の教皇書簡は、Reims 教会が、「耐エガタイ負債ヲ背負ツテ」いる事を報じ、その属司教たちに財政的援助を呼びかけているからである。[57]

Reims の財政状態が、こうした非常手段にうつたえねばならぬ程に悪化した原因は、単にカテドラル建設のためばかりではなかつた。例えば、Louis VIII, Louis IX 両王の戴冠式に際しての出費は、後述するごとくそれぞれ 4,000£. 以上であり、この額を、数年の間隔で支出せねばならなかつた事は大きな打撃であつたであろう。又一二三〇年代の大部分を、Reims 市民との係争関係にすごした（後述第五章）この教会は、Chartres におけるが如き多くの援助を、市民からカテドラル建設のために期待することは不可能だつたに違いない。何れにせよ、裁判、破門、贖宥の濫発で流入した金銭は、その相当部分が建設資金にまわされた可能性がある。

資金源がほぼ以上の推定のようなものであつたとすれば、それらは何処を通つて建設現場へ投入されたであろうか。若しこれが capitulum の責任で行われていたとすれば、最も蓋然性のある収納支出の窓口は thesaurarius である。[58] しかし Reims の場合に、この thesaurarius は、一二一五年九月以後は、少なくともこの職責を果してはいなかつた。同年同月の協定書（carta compositionis）は次の如く云う。

「…Reims 教会ハ、教会内デナサレルスベテノ奉献ト献金トヲ、〔ソレラガ教会内〕ノ何処デ献ゲラレヨウトモ自由且完全ニ受取ルコト。又当該教会ニモタラサレルベキ capitagia[a] ヤ、或ハ小教区司祭ガ、蠟燭ノタメニ納メ、モタラスベキ denarius ヤ obolus[b] ヲモ〔自由且完全ニ受取ルコト〕。シカシテコノ故ニ、他〔デハソレゾレ〕ノ thesaurarii ガ行ツテイルガ如キ、照明ノタメノスベテノ必要出費ハ、当該教会ガ行ナウ。又教会ノ装飾ヤ修復ノタメノ〔必要

出費〕モ、当該教会ニヨツテ支出サレネバナラナイ。又ソノ他〔他教会デハ〕subthesaurii ノ手デ与エラレ（支出サレ）、或ハ入金サルベキ〔費目ニツイテモ同様デアル〕。但シ……[59]」

ここで云う「Reims ノ教会」とは、おそらくは capitulum を指しているのではなく、大司教の人格によって代表される「教会」を指しているものと思われる。その際に、大司教及び archidiaconi の officialités による裁判関係収入は、如何に扱われていたであろうか。Romana ecclesia にも、一二四八年の裁定書にも、すでに述べた如く、Reims の officialités 相互間の管轄問題については、一言の言及もない。それらの間に競合関係がなかったとは考えられないが、この問題の解結は、一二五四年を待たねばならなかった。同年一月十六日は教皇の Constitutiones は、始めて Reims の多元的な裁判権を整序しようとしたものである。[60] 裁判権そのものに関する諸項は後日にゆずるとして、此処では次の二点を指摘するに留める。即ち第一に、大司教と archidiaconi 及びそれぞれの officiales は、「全員ガソレゾレ各自ノ意志ニ基ズク判断ニヨツテ、聖職者、俗人ヲ問ワズ、civitas カラデモ又 Reims ノ archidiaconus 管区カラデアロウト〔欲スル人物ヲ〕、スベテノ且ソレゾレノ件ニツイテ、〔下級〕裁判官ニ選ブ権限ヲ有シテイルコト[61]」である。第二に「archidiaconus ハ officiales ニツキ、或ハソレラノ法廷ノ〔罰金〕評価官[a] (taxator) デアレ、罰金収納官 (receptor emendarum) デアレ、大司教ニ属スル聖職者タチノ前デ、罰金ニツイテモ、ソノ他ニツイテモ、同上大司教ノ全権利ヲ、善意ヲモツテ (bona fide) 尊重シ且守ルコトヲ誓イ、……又同様ニ、大司教ハソノ officiales ニツキ、ソノ法廷ノ罰金評価官デアレ罰金収納官デアレ、同上 archidiaconatus ノ諸権利ト諸収入ヲ保全スルコトヲ同ジク誓ウヨウニ約束スル」[62]ことを規定している点である。これらは、Reims の三 officialités が、裁判権上も、財政権上も、その末端にいたるまで、単一系列上にそれぞれ独立するように配慮された事を物語っている。この教皇文書は、一二五〇年に教皇 Innocentius IV が、その甥 Ottobono を、大司教をして、Reims の大 archidiaconus の地位につけさせている所から、[63]その甥の利害をまもるために発行されたも

のとも考えられる。しかし taxator や receptor emendarum と云つた職は恐らくは相当にさかのぼつて各 officialités に附随していたものと想像される。そしてその際には、Romana ecclesia が弾該を加えた種類の収入は、末端から、それぞれの officialité を経て、直ちに大司教と大小 archidiaconi の手に入つた筈であるし、それがカテドラル建設資金に流れる場合には、大司教や大小 archidiaconi の手から、改めて献金の形をとつて投入されたものと想像する他はない。

我々は先に、十三世紀末の Autun 修復工事について、capitulum からその会計一切を請負つていたと思われる provisor の存在を確かめ得た。事実「修復工事」に関する限り、一般には capitulum、特に thesaurarius の権限で行われたらしい事を、前掲一二一五年の Reimsの thesaurarius に関する協定書が暗示している。そしてこれさえも、Reims の場合には capitulum の手を離れていた。教会堂新規建設工事に関して、その権限の所在は、どの史料も明らかにはしていない。たしかに、新カテドラルは、献堂式と同時に capitulum に引わたされているが(第一章)、この事実は、これまでの諸考察にてらしてみれば、維持の責任の引わたしと考えるべきで、capitulum そのものが、建設の全責任を負つていた事を意味してはいない。

建設工事の最終責任は、Reims の場合には少なくとも、こうして「Reims 教会」にあり、この教会は云うまでもなく大司教によつて代表される。これを他の司教やカテドラルに一般化する事には、慎重を要するであろうが、半面この一例があることは、capitulum に全責任を帰する事をも同時に妨げることになる。更に次の如き推定もあわせて結論に向わねばならない。即ちカテドラルは「神の家」(Casa Dei) であり、それ自体は原則的に永久性をもつべきものである。たまたま火災等によつてそれが破壊された場合、その再建、或はその様式の決定は、誰によつて決断されるべきであろうか。大司教・司教をおいて他にない。又その工事が終了すれば、永久にその姿であるべきカテドラルの——修復はともかく——建設工事のために、教会は新たに責任者を設置すべきであろうか。当然「神ノ恩寵ニヨツテ」その職にある大司教、

司教こそ、その栄をにならに最もふさわしいのではないだろうか。

以上の如くして我々は、建設工事の進行も、又それに先立つ新様式の決定も、大司教、司教の責任において果されたものと考える。そしてこの事は、我々が次章において王権との結びつきを考察せんとする場合に、その焦点をこれら大司教、司教に合わせる事を許すものである。

註

(1) Quicherat, J., dans *Mélanges d'Archéologie et d'Histoire*, 2 vol., Paris, 1886, cité par Gimpel, *Les bâtisseurs*, p. 60.

(2) この項目は、工事会計が予期していなかつた寄附(bénéfices)を含む。例えば遺贈（legs）であるが、Cluny の一婦人からの一例を除けば、何れも Autun 司教区の住民からであり、更にそのうち一例（Magister Humbertus de Virgultis）を除けば、何れも農民のものである。その他 charrues の賃貸料の獻金が三例記載されているが、5 s. 9 d. ; 14 s. ; 12 s. 2 d. と何れも少額である。(Gimpel, *loc. cit.*)

(3) Autun の主任司祭（curé）の家、その他個人宅、或は教区教会に、八ケ所もうけられた寄金箱（troncs）の収入である。(Gimpel, *loc. cit.*)

(4) Quicherat が列挙した三十四費目の合計。細目は行論上不要であるから略す。(cf. Gimpel, *op. cit.*, pp. 60-63.)

(5) cité Gimpel, *op. cit.*, p. 59.

(a) ≪obole≫（obolus）は本来計量又は貨幣の小単位である。Du Cange, Niermeyer ともにこれ以上の追究を行つていないが、たまたま一二二五年の Reims 大司教 Albericus の一文書（Varin, *Arch. adm.*, 1-2, n° LXIII, p. 487.）には次の如き言及が見られる。

「…蠟燭〔代〕(cera) ノタメニ、小教区ノ司祭タチガ〔大司教座教会ニ〕納メ且モタラサネバナラヌ denarius モ obolus モ…」(...et tam denarios quam *obolos* quos presbiteri parochiales solent reddere et afferre pro cera ; ....)

以上によつて、この obole とは、蠟燭代の名目で、教区の――恐らくは――全収入に微細な比率でかかつてくる、一種の賦加金であつたと推定される。

(b) ≪provisieur≫（provisor）なる名称は、中世において、極めて多方面に用いられているが（cf. Du Cange, *Glossarium*, v° ≪*PROVISOR*≫etc., t. VI, pp. 547-548 ; Niermeyer, *Mediae Latinitatis Lexicon Minus*, v° ≪*PROVISOR*≫, fasc. 10, p. 868.）Du Cange にも Niermeyer にも、これをもつて capitulum の構成員であるとする用例は見出せない。むしろ Du Cange ≪*Provisores Ecclesiarum*≫ の項に、これをもつて「教会ノ財産ヤ所有ヲ管理シタ俗人」(nuncpati Laici, qui earum bona et possessiones administ-

rabant) との定義が与えられている。もしも Robert が capitulum の一員であれば、その肩書は当然 clerc ではなく、chanoine でなければならない。従って彼は、Autun の chapitre から工事会計事務を請負っていた俗人 clerc であったと考えられる。

(7) Simson, Otto von, ***The Gothic Cathedral, the Origins of Gothic Architecture and the Medieval Concept of Order***, with an Appendix : ***On the proportions of the South Tower of Chartres Cathedral***, by Ernst Levy, London, 1956, p. 159 et sq.

(8) ***loc. cit.***, p. 176. この改革は、Guillaume de Champagne の司教当時に始められ、Renaud de Mouçon によって完成された。改革の細目は不明であるが、恐らくは Guillaume de Champagne が Reims 大司教として行ったそれ（前章参照）に類似したものではなかったであろうか。

(9) ***loc. cit.***, p. 175 ; ***Dictionnaire d'histoire et de géographie ecclésiastique***, t. XII, v° ≪***Chartres***≫, par G. Delaporte, col. 554. Chanoines の数は、十四世紀には七十七、役職者は十、十一世紀以来十七を数えた。当時司教の年収は現行ドルに換算して $1,500,000 と推定されているが（von Simson, ***loc. cit***, et n. 60.）Chanoines 全体の年収は、これを越えていたであろう。何となれば decanus のみの年収が $700,000 を越えていたと推定されるからである。

(10) Stein, ***op. cit.***, p. 37.

(11) von Simson, ***op. cit.***, p. 172 et notes 47 et 48. は、indulgentia の収入を、附加的な可能性として推定する。indulgentia が慣行されるにいたるのは、正に十三世紀の事であり、従って工事の後期にいたる程その可能性をますことは疑い得ないが、Chartres については、依るべき史料がない。von Simson は、一二七二年の Lyon 公会議において、Regensburg 司教が努力して、そのカテドラル建設の為の献金者につき、indulgentia を認める決定を下さしめたと云う事実をのみ援用するが、Concilium Lugdunense II Generale が開かれたのは一二七四年であり、その canones 中には少なくともかかる決定を見出し得ない。（Mansi, ***Sacrorum Conciliorum nova et amplissima Collectio***, t. 24, Concilium Lugdunense II. Generale a Gregorio papa X celebratum, Additio, pars III, cap. VIII et IX, col. 131-132.）しかし他方、Melior de Pise が、一般に対しては、Chartres の工事への参与が、霊的なむくいのある一種の poenitentia であると説いて、事実上の indulgentia を利用した事は、von Simson が云う如く、大いにあり得る事ではあるが、それのみならば、その収入はむしろ第4項の募金として取扱かわれるべきであろう。制度としての indulgentia については後述する。

(12) von Simson, ***op. cit.***, pp. 163 et sq., 177. 拙稿第一章参照。

(13) ガラス絵のイコノグラフィックな記述は、差当って、Houvet, ***Monographie de la cathédrale de Chartres***, (***Extrait d'un***

ouvrage couronné par l'Académie française), Chartres, 1924, pp. 69. sq. による。その他 Merlet, *op. cit.*, pp. 35. sq. ; von Simson, *op. cit.*, pp. 180-182.

(14) Houvet は南北袖廊バラ窓をのぞいたすべての窓に、nos 1～176. の一連番号を、西正面北側から、南にまわり、身廊部側廊(南)・袖廊(南)・祭室部側廊(南)・放射状祭室・祭室部側廊(北)・袖廊(北)・身廊部側廊(北)・ついでほぼ同一順序で高窓につけた。祭室部側廊及び放射状祭室の番号は、従つて nos 13-55.、身廊部側廊は、nos 4-9. (南) nos 59-64. (北)、袖廊側廊は nos 10-12.(南) nos 56-58. である。高窓列については、祭室部（南から北へ）nos 105-135, 身廊部 nos 65-85. (南) nos 155-176, 袖廊部 nos 86-104. (南) nos 136-154. (北)及びバラ窓南北それぞれに A～E, 西正面 nos 1-3, 176. となつている。以上のうち、袖廊バラ窓をのぞき、聖俗諸侯の奉献と判明しているものを挙げると次のようになる。

nº 26. (Marguerite de Lèves, Hugues de Meslay et Guérin de Friaize) ; nº 28. (?) ; nº 35. (Chanoine Henri Noblet) ; nº 40. (un ecclésiastique) ; nº 53. (Etienne Chardonel et sa famille) ; nº 54. (Geoffroy Chardonel) ; nº 58. (?) ; nº 74. (?) ; nos 93, 94. (Pierre Mauclerc, comte de Dreux et duc de Bretagne) ; nº 99. (?) ; nº 100 (un ecclésiastique) ; nº 106. (Bouchard de Marly) ; nº 107. (la famille de Beaumont) ; nº 110. (la famille de Courtenay) ; nº 112. (un chanoine diacre) ; nos 113, 116. (la maison de Montfort) ; nº 126. (Louis VIII) ; nos 127, 128. (?) ; nº 129. (Thibault VI, comte de Champagne) ; nº 132. (un roi de Castille) ; nº 133. (Robert de Bérou) ; nº 134. (un seigneur de la famille de Renaud de Mouçon) ; nº 137. (un chevalier) ; nº 140. (un prêtre) ; nº 141. (un prêtre) ; nº 145. (Saint Louis et Blanche de Castille) ; nº 154. (Philippe Hurepel) ; nº 157. (2 donateurs). 以上の如くして、これら聖俗諸侯の奉献は、ほぼ袖廊・祭室部とその高窓に集中している。

(15) Houvet, *loc. cit.* 同様に窓を一連番号で列挙すれば、

nº 4. (les armuriers) ; nº 5. (les porteurs d'eau) ; nº 6. (les cordoniers) ; nº 13. (les marchands de comestibles) ; nº 24. (un donateur, cordonier ou corroyeur) ; nº 25. (les tenneurs) ; nº 30 (les maçons) ; nº 34. (les boulangers) ; nº 37. (les marchands de fourrures et drapiers) ; nº 38. (les marchands de fourrures) ; nº 39. (les tisserands) ; nº 41. (les cordonniers) ; nº 42. (les maçons, tailleurs de pierre etc.) ; nº 43. (les tisserands etc.) ; nº 45. (les charpentiers, les menusiers, les charrons et les tonneliers) ; nº 59. (les maréchaux) ; nº 60. les épiciers, (les merciers, les apothicaires) ; nº 61. (les changeurs) ; nº 62. (les drapiers) ; nº 63. (le marchands de vin) ; nº 64. (les charrons et les tonneliers) ; nº 68. (les boulangers, les pâtissiers) ; nº 69. (les boulangers) ; nº 77. (les tourneurs) ;

nº 111. (les mégissiers) ; nº 117. (les changeurs) ; nº 118. (les marchands de fourrures) ; nº 119. (les boulangers) ; nº 120. (les boulangers) ; nº 123. (les changeurs). ; nº 122. (les bouhers) ; nº 160. (les laboureurs) ; nº 164. (les changeurs) ; nº 167. (les mégissiers) ; nº 168. (les pelletiers) ; nº 170. (les tisserands).

就中肉屋とパン屋の奉献が多く、身廊に集中する傾向がある。

(16) Houvet, *loc. cit.* nº 95－E. にその三者の姿がある。この一家は Louis VI からの分れで、Pierre Mauclerc は Alix de Thouars との結婚によつて duché de Bretagne を併せた。この人物が、Blanche de Castille 摂政期間の、諸侯の叛乱に指導的役割を果したことに注意 (von Simson, *loc. cit.*)。

(17) Houvet, *loc. cit.*, nº 145.

(18) 拙稿「初期ゴシック教会堂の成立」史学雑誌・第六十一篇第一号、p. 38.

(19) 拙稿、上、第二章。

(20) von Simson, *op. cit.*, p. 178.

(21) *loc. cit.*, p. 170.

(22) Concilium Lateranense IV. Generale. sub Innocentio IV. summo pontifice. an. 1215. Mansi, *Ampliss. coll. Concil.*, t. 22, col. 1049-1050. LXII. *Ne reliquae sanctorum ostendatur extra capsam ; ne novae habeantur in veneratione sine Romana ecclesia.*

Cum ex eo quidam sanctorum reliquias exponunt venales, et eas passim ostendunt, Christianae religioni sit detractum saepius : ne detrahatur in posterum, praesenti decreto statuimus, ut antiquae reliquiae amodo extra capsam non ostendantur, nec exponantur venales. Inventas autem de novo nemo publice venerari praesumat, nisi prius authoritate Romani pontificis fuerint approbatae.

Praelati vero de cetero non permittant illos, qui ad eorum ecclesias causa venerationis accedunt, vanis figmentis, aut falsis decipi documentis, sicut et in plerisque locis occasione quaestus fieri consuevit. Eleemosynarum quoque quaestores quorum quidam se alios mentiendo abusiones nonnullas in sua praedicatione proponunt, admitti, nisi apostolicas vel dioecesani episcopi litteras veras exhibeant, prohibemus. Et tunc, praeter id quod in ipsis continebitur litteris, nihil populo proponere permittantur.....

(23) cf. Decretalium D. Gregorii Papae IX. Compilatio, (*Corpus iuris canonici*, éd. Friedberg, t. II, col. 888-889), lib. V. tit. XXXVIII. *De poenitentiis et Remissionibus*, cap. XIV.

(24) Amiens については差当り、Boinet, *op. cit.*, p. 9-10.

(25) Varin, *Arch. adm.*, 1-2, nº CCVI, p. 670 sq. ; Cf. Potthast, *Regesta*, II, nº 12062, p. 1022.

(26) Varin, *loc. cit.*, p. 670, n. 1. この bulla は、次註にのべる Sextus 中の 10 canones によつてのみ知られて居り、Varin

以前の texte は、何れもこの長い préambule の存在を知らなかつた。Varin はこれを Bibliothèque Royale（現 Bibliothèque Nationale），ms. lat. n° 5210. 中に発見してつなぎ合わせたものである。以上の来歴からしても、本史料の性格を確かめることは困難である。Varin 自身は、Reims 大司教とその属司教たちの間の紛争が、総会会議のために Lyon に滞在していた教皇 Innocentius IV のもとに持出され、其処で下された Sententia とみているようであるし（*loc. cit.*），Potthast は、Paris 大学の magistri 宛の当該問題に関する指示書とみているようである（Potthast, *loc. cit.*）。何れにせよ、前文を除いて本文はすべて、Lugdunense I. Generale Concilium (a° 1245) の canones に含まれている。cf. Mansi, *Ampliss. Coll.*, t. 23, col. 652 sq.

(27) *De appellationibus* (VI decret. lib. 2 tit. 15. c. 3.) ; *de officio ordinarii* (VI decret. lib. 1. tit. 16. c. 1.) ; *de foro competenti* (VI decret. lib. 2. tit. 2. c. 1.) ; *de. poenis* (VI decret. lib. 5. tit. 9. c. 1.) ; *de sententia excommunicationis* (VI decret. lib. 5. tit. 11. c. 5.) ; *de poenitentiis et remissionibus* (VI decret. lib. 5. tit. 10. c. 1.) ; *de officio vicarii* (VI decret. lib. 1. tit. 13. c. 1.) ; *de supplenda negligentia prelatorum* (VI decret. lib. 1. tit. 8. c. 1.) ; *de testibus* (VI decret. lib. 2. tit. 10. c. 3.) ; *de censibus et procuratoribus* (VI decret. lib. 3. tit. 20. c. 1.).

(28) Varin, *loc. cit.*, p. 674. Questoribus preterea qui pro fabrica remensis ecclesie destinantur, citandi subditos eorumdem suffraganeorum quos iidem questores sibi resistere, aut nolle parere dixerint, ut coram officialibus eisdem compareant, consumunt (*sic*, concedunt?) potestatem ; et taliter citandi coguntur coram eisdem officialibus respondere. Idem quoque archiepiscopus, gravamina gravaminibus addens, de novo eisdem suffraganeis, in virtute sancte obediencie, precepit ut, questores ab ipso pro eadem fabrica destinatos recipientes honeste, permitterent cum expectacione pacifica, eorum subditis exprimere negocium ecclesie supradicte ; injungens nichilominus ut a se ipsis incipientes, de bonis sibi a Deo collatis largas ad ejusdem fabrice opus elemosynas destinarent, ac ut sui denunciacione mandati, et ipsorum suffraganeorum monicionibus iidem inducerentur subditi, quod subeant benefactorum ejusdem ecclesie confrerias, et unusquisque confratrum juxta facultates proprias singulis annis ipsam visitaret ecclesiam in certa summa pecunie vel annona ; necnon ut in ipsorum questorum adventum festum fieret, feriis indictis solemntibus, et predicti subditi convocati non presumerant (*sic*), sicut nec (*sic*, in?) die dominica, presentibus eisdem questoribus, donec super hoc ab eis obtinerent licenciam, operari ; ac nec (*sic*, ut?) ecclesie predicte nuncii ceteris questoribus preferrentur, nullis aliis infra ebdomadam in qua iidem recipiendi essent nuncii admitten-

dis. Concessit etiam per suam provinciam indulgenciam unius anni benefactoribus ejusdem fabrice, statuta concilii generalis excedendo, faciens insuper remissiones super votorum transgressionibus, et offensis parentibus irrogatis. . . .

(29) 例えば Demaison, *op. cit.*, p. 10.

(30) 前註(27)に掲げた主文諸項目を見よ。

(31) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CXCIII, p. 657 ; Cf. Potthast, *Regesta*, II, nº 11219. Innocentius. . . Cum sicut ex parte vestra fuit propositum coram nobis, nunnulle indulgentie ac privilegia vobis et monasterio vestro a predecessoribus nostris sunt concessa, quorum aliquibus uti per negligentiam hactenus omisistis, nos vestris supplicationibus inclinati, ut eisdem privilegiis ac indulgentiis in judiciis et aliis locis uti libere, prout expedire videritis, valeatis, alicujus lapsu temporis non obstante . . . . , indulgemus ; ita tamen quod nullum per hoc, illis qui contra vos super hiis legitime prescripserunt, prejudicium generetur. . . .

(32) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CXCIV, p. 658 ; Cf. Potthast, *Regesta*, II, nº 11250. Innocentius. . . dilectis filiis abbati et conventui monasterii S. Remigii remensis. Cum, sicut ex parte vestra fuit propositum coram nobis, nonnulli ecclesiarum prelati et officiales eorum, de causis laicorum hominum monasterii vestri quarum cognitio non ad eos, sed ad vos, dinoscitur pertinere, pro eo maxime de facto cum de jure non possint, cognoscere in vestrum prejudicium moliantur ; quod si conventus coram eis laicus, a laico, licet ad ipsos non spectet cognitio, fori sui exceptione proposita per appellationem vel alio legitimo modo, ab examine ipsorum recesserint (*sic*), ipsi protinus in eum tanquam in contumacem excommunicationis sententiam proferant ; pro cujus relaxatione novem libras et unum denarium si sit dives, alias aliam certam pecunie summam, extorquent emende nomine, contra justitiam ab eodem ; . . . . .

(33) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CXCVII, p. 659 ; Cf. Potthast, *Regesta*, II, nº 11254. Innocentius. . . Dilectiis abbati et conventui monasterii S. Remigii remensis. . . Ex parte vestra fuit propositum coram nobis, quod nunnulli ecclesiarum prelati, ac eorum officiales, ceca cupiditate seducti, nec ponentes avarice sue modum, ut ab hominibus et mansionariis vestri monasterii occasionem habeant extorquendi, ipsos interdum excommunicant, quandoque vero supponunt ecclesiastico interdicto, nec volunt hujusmodi sententias relaxare, nisi prius eis soluta quadam pecunie quantitate emende nomine ; et si forte ipsas relaxent, illos in quos late fuerant, si non solvant hujusmodi pecuniam, in easdem reducunt sententias, pretendentes antiquam super hoc consuetudinem, que dicti potest verius corruptela ; . . . .

(34) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CXCIX, p. 660-661 ; Cf.

Potthast, *Regesta*, II, nº 11513. Cum sicut nobis exponere curavistis, sepe contingat homines et mansionarios vestri monasterii, vel alios ad forum vestrum spectantes, coram vobis, prepositis vel judiciariis vestris, pro ipsorum excessibus et ex causis legitimis non ad forum ecclesiasticum spectantibus, conveniri, ipsi ut vestrum declinent judicium, et jurisdictionem elidant, ad judices ecclesiasticos ordinarios locorum appellant, quorum appellationes licet frivolas indifferenter in ipsius monasterii prejudicium admittentes, in vos, prepositos, et justiciarios supradictos, si contra ipsos processeritis appellantes, licet super hiis nullam jurisdictionem habere noscantur, interdicti, suspensionis et excommunicationis ferunt sententias, solam consuetudinem que dici potest corruptela verius pretendentes ; . . .

(35) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CCVI, p. 676-678. . . . Pro parte autem ejusdem archiepiscopi et contra propositum extitit : quod curia remensis, appellaciones ab officialibus suffraganeorum suorum, archidiaconis, aliisque prelatis sue provincie interjectas ad ipsam, recipi, et cognosci de eis, prout jure vel consuetudine sibi licet, in quasi possessione recipiendi et cognoscendi taliter fuit a tempore a quo memoria non existit ; nec est hujus consuetudo remensis ecclesie specialis, sed generalis per omnes metropoles gallicanas. . . . Neque iidem officiales remensis ecclesie questoribus facultatem citandi tribuunt, sicut pars adversa proponit ; suffraganeos autem suos eorumque subditos exortari et inducere, ut de bonis sibi a Deo collatis ad opus fabrice remensis ecclesie largiantur, confrerias faciant, et alia que ad consummacionem ipsius operis necessaria dignoscuntur, et de jure et equitate, ac ejusdem ecclesie consuetudine, sibi licet ; . . . Officiales quoque remenses, cum maxima deliberacione, ac pro gravissima causa, non absque multa cordis amaritudine, suos interdum suffraganeos interdicunt, excommunicant, et suspendunt ; . . .

(36) officialité については Gaudemet, *op. cit.*, dans Lot-Fawtier, *Histoire des Institutions*, t. III, p. 258 sq. ; 特に Reims のそれについては、O. Grandmottet, *Les officialités de Reims*, dans *Bulletin d'information de l'Institut de Recherche et d' Histoire des Textes*, nº 4, 1956, p. 77. sq.

(37) Varin, *loc. cit.*, p. 680. . . . . suorumque officialium qui generaliter de causis ad ipsorum (episcoporum) forum pertinentibus, eorumdem vices supplendo cognoscunt, unum et idem consistorium sive auditorium (cum episcopis constituentes). . . .

(38) Grandmottet, *loc. cit.* Reims の officiales は十二世紀後半にさかのぼり得、その人数は最初から二名であった。これを一応制度化したのが Guillaume de Champagne である。archidiaconi (archidiacres) は大小に分かれ、大の方は archidiaco-

nus Remensis′ 小の方は archidiaconus ecclesie remensis 或は archidiacre de Champagne と呼ばれた。これらの officialités もそれぞれ十二世紀末に′ 恐らくは大司教のそれを真似て′ 制度化された様である。

(39) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CCIX, p. 688-690. 19 octobre 1246 ; Compromissum inter archiepiscopum remensem ex una parte, et suessionensem, ambianensem, laudunensem, tornacensem, novimensem, attrebatensem episcopos, ex altera, de P(etro) albanensi episcopo pro judice suscipiendo, super articulis in quibus erat archiepiscopo remensi consuetudo per sentenciam apostolicam reservata.

(40) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CCXII, p. 694 sq. 23 janvier 1248; Sentencia Petri albanensis episcopi in causa que vertebatur inter archiepiscopum remensem et ejus suffraganeos. (以下 Sententia と略称)。

(41) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CCXV, p. 701-702. Ier avril 1248; Privilegium D. Innocencii papa IV, sentencie P. albanensis episcopi confirmatorium. Cf. Potthast, *Regesta*, II, nº 12887, "*Etsi iusta sententia*".

(42) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CCVI, p. 680. Ab archidiaconis vero, aliisque inferioribus prelatis suffraganeis subjectis eisdem, et eorum officialibus, ad suffraganeos ipsos debet, et non ad eandem curiam, omissis dictis suffraganeis, appellari; nisi aliud remensi ecclesie de consuetudine competat in hac parte. ...

(43) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CCXII, p. 695. ... in hac parte dicimus et ordinamus, quod a predictis inferioribus non possit, omisso medio, ante diffinitivam sentenciam aliquatenus appellari; ...

「……コノ部分ニオイテ我々ハ述ベ且定メル。即チ上記下級者ニヨッテハ′ 中間者ヲ排除シテ′ 最終宣告（最終審）ハ′ 何事ヲモ上訴サレ得ヌコトヲ。……」

(44) *Ibidem*, p. 695-696.

(45) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CCVI, p. 681. Prohibemus quoque, ne remenses archiepiscopi in dyocesibus suffraganeorum suorum foraneos officiales constituant; ... nisi aliud remensis curia, circa talium institutionem officialium de consuetudine optineat speciali. ...

「更ニ Reims 大司教ガ′ ソノ属司教ノ教区内ニ′ foranei officiales ヲ設定スルコトヲ禁止スル。……Reims ノ法廷ガ′ カカル officialité ヲ′ 特別ナ consuetudo ニヨリ制度〔トシテ〕獲得〔セヌ〕限リ。……」

Cf. *Ibidem*, nº CCXII, p. 697. ... dicimus et ordinamus, quod archiepiscopus, sive curia remensis, in dyocesibus suffraganeorum, hujus(modi) foraneos officiales non habeant, nec de cetero non constituant.

「コノ部ニオイテハ次ノ如ク述ベ且定メル。大司教′ 或ハ Reims ノ法廷ハ′ 属司教ノ司教区内ニ′ 別ニ定メザル限リハ′ カカル foranei officiales ヲ有セザルコト。」

(46) *Ibidem*, p. 697. Inhibemus autem ne nova media quam que hactenus solent esse, creantur vel fiant, vel eciam concessiones in quibus gradus fiant in fraudem et prejudicium jurisdictionis curie remensis, seu archiepiscopi memorati.

「……シカシテ従来モシカアリシガ如ク、nova media ヲ創設シ或ハ作ルコトヲ、或ハ更ニ Reims ノ法廷又ハ大司教〔ニ属スルコトノ〕知悉サレタル juridictio ニ損害ヲ与エ、又ソノ〔権利ヲ〕損ナウガ如キ、等級ヲ作ル concessio ヲナスコトヲ禁ズル。」

(47) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº CCVI, p. 682. Officiales autem remensis archiepiscopi, quandiu in sua provincia, vel circa illam extiterint (*sic*, extiterit?), in suffraganeos suos interdicti vel suspentionis, aut excommunicationis proferre sententias non attemptent. Et hoc idem ab officialibus aliorum metropolitanorum, circa ipsorum suffraganeos, quibus ob reverentiam pontificalis officii deferri volumus in hac parte, precipimus observari.

(48) *Ibidem*, p. 683-684. Ceterum interdicti, suspensionis, vel excommunicacionis sentencias latas ab officialibus archidiaconorum, seu quibuslibet aliis jurisdictionem habentibus suffraganeorum remensis ecclesie subdits, remensis archiepiscopus, (et ejus officiales), obmissis ipsis excommunicatoribus, non relaxent, salva tamen super hoc contraria consuetudine si quam habent;……

(49) Varin, *Arch. adm*, I-2, nº CCXII, p. 699. . . dicimus et ordinamus quod nullo modo relaxent seu relaxari mandent hujus(modi) sentencias, nisi prout jusum fuerit, et cum debita cause cognicione.

(50) Varin, *loc. cit.*, nº CCVI, p. 684. Questoribus autem fabrice remensis ecclesie, remensis archiepiscopus, sive ejus officiales citandi suffraganeorum ipsius ecclesie subditos, quos iidem (questores) sibi resistere, aut nolle parere dixerint, ut super hoc compareant coram ipsis, nequaquam tribuant potestatem. Super benigna vero (ipsorum) receptione ac subventione ipsi fabrice facienda, possunt eosdem suffraganeos, et alios Christi fideles remensis provincie caritative monere. In concedendis vero indulgentiis, non excedat remensis archiepiscopus statutum concilii generalis.

(51) Indulgentiae 一般については、A. Vacant, E. Magnet, E. Amann, *Dictionnaire de Théologie Catholique*, VII-2, Paris, 1923, vº ≪*Indulgences*≫, par Et. Magnin, col. 1594 sq.

(52) Decretalium D. Gregorii Papae IX. Compilatio, lib. V. tit. XXXVIII. c. IV. (*Corpus iuris canonici*, éd. Friedberg, II, col. 885.); Cf. Jaffé-Wattenbach, *Regesta*, nº 12411: Quod autem consultuisti, utrum remissiones, quae fiunt in dedicationibus ecclesiarum aut conferentibus ad aedificationem pontium, aliis prosint, quam his, qui remit-

tentibus subsunt, hoc volumus tuam fraternitatem (firmiter) tenere, quod, quum a non suo iudice ligari nullus valeat vel absolvi, remissiones praedictas prodesse illis tantummodos arbitramur, quibus, ut prosint, proprii iudices specialiter indulserunt.

(a) 教会は indulgentiae なる語をきらい、出来るだけ remissiones を用いた。(Magnin, *loc. cit.*)

(53) Concilium Lateranense IV. Generale. sub Innocentio IV. summo pontifice. an. 1215. MansI, ***Ampliss. coll. Concil.***, t. 22, col. 1050-1051. ... Qui autem ad quaerendas ellemosynas destinantur, modesti sint et discreti, nec in tabernis aut locis aliis incongruis hospitentur, nec inutiles faciant aut sumptuosas expensas caventes omnino, ne falsae religionis habitum gestent.

Ad haec, quia per indiscretas et superfluas indulgentias, quas quidam ecclesiarum praelati facere non verentur, et claves ecclesiae contemnuntur, et poenitentialis satisfactio enervatur: decernimus ut, cum dedicatur basilica, non extendatur indulgentia ultra annum, sive ab uno solo, sive a pluribus episcopis dedicetur; ac deinde in anniversario dedicationis tempore quadraginta dies de injunctis poenitentiis indulta remissio non excedat. ... ……この部分は註(22)所掲の部分に続く。

Cf. Decret. Gregor. IX, lib. V. tit. XXXVIII. c. XIV.

(54) Varin, ***Arch. adm.***, I-2, nº CXVIII, p. 553-555. ....

Contra questores ecclesiarum pro ecclesiis et piis locis, statuimus ut nulli predicatores mercenarii admittantur; sed per solos sacerdotes dictorum locorum negocia fideliter exponantur. ...

Nulli autem predicatori, vel minori, seu religioso cuilibet, detur licencia a prelatis predicandi, confessiones audiendi, penitencias injungendi et similia faciendi; preterquam in civitate vel diocesi, in qua vel quibus sit conventus talium, et quod ejusdem conventus sit cui talia committuntur; dummodo sit conventus sibi talium religiosorum, alioquin assumi valeant aliunde, generalibus magistris vel prioribus dumtaxat exceptis, et magistris in theologica facultate.

(55) Concilium Biterrense, an. 1246, c. V. Mansi, ***Ampliss. coll. Concil.***, t. 23, col. 693.

Cum certum sit per venales ac conductores quaestores, tum ex prava ipsorum vita, tum ex praedicatione erronea, multa scandalosa provenisse, damnatis in inferno liberationem pro modica pecunia promittentes.

(56) 前掲註(54)の史料。更に(53)所掲の canon の前半部に云う。

「…募金者ハ、教皇猊下ノ特免状 (indulgentia) 又ハ教区司教ノ書面ニ記載サレテイナイ限リ、教会ニテ populus ニ説教スルコトハ許サレナイ。又文書又ハ書付ケ (cellua＝cedula＝schedula) ナシニハ教会ニ受容レラレナイ。又修道士、又ハ同

等ノ人物デアッテ、ソノ上長ノ証明書(testinoniales litterae)ヲ携行シテイナイ限リ、他ノ〔場所〕デモソレ（説教）ヲ許可サレナイ。」

Ad quorundam insolentiam reformandam, ne profectus fidei retardetur praecipimus quod quaestores non permittantur in ecclesiis aliud populo praedicare, quam in indulgentiis domini papae, et sui dioecesani litteris continetur, nec cartelli vel cellulae recipiantur ab eisdem, nec ad hoc de cetero aliquis admittatur, nisi frater fuerit, vel alia persona idonea, majoris sui testimoniales litteras secum portans.

(57) Varin, *Arch. adm.*, I-2. nº CCXXXIV, pp. 722-725. Hic est quod cum remensis ecclesia importabili, sicut fertur, prematur onere debitorum, propter quod vestrum suffragium est sibi plurimum opportunum, ……

cf. Potthast, *Regesta*, II, nº. 14225.

(58) 前章註(7)参照。

(59) Varin, *Arch. adm.*, I-2, nº. LXIII, p. 487.

Noverint universi quod contentio que inter dilectos filios capitulum et A. thesaurarium remensis ecclesie, super oblationibus et rebus aliis, vertebatur, de assensu et voluntate utrius(que) partis, per amicabilem compositionem, pacificata est in hunc modum: quod ecclesia remensis libere et integre percipiet omnes oblationes et elemosinas que in ecclesia fient, et ubicumque in ea offerentur, et capitagia que

solent in eadem ecclesia afferri, et tam denarios quam obolos quos presbiteri parochiales solent reddere et afferre pro cera; et propter hoc faciet eadem ecclesia omnes sumptus necessarios, quales hucusque alii fecerunt thesaurarii, ad luminare, et eadem que circa ornatum et reparationem ecclesie solent expendi, et alia que per manum subthesaurraii solent dari et procurari; excepto quod ……

本文書は大司教 Albericus の名で出された Reims の capitulum 対 thesaurarius の協定書である。当事者について、文中の《ecclesia remensis》が、訳出したように《Reimsノ教会》を指すのか、或は《Reimsノcapitulum》を指すのかが疑わしい。しかし本訳は前者をとった。何となれば、十三世紀の Reims の殆んど全文書中に、capitulum を指示するために ecclesia を使った例がないし、又前章で指摘したように、この両者が実質的に同一物として表象される可能性は、殆んど考えられないからである。更に訳出したような収納支出の費目が capitulum の権限に移ったと考えようとすれば、その際には、thesaurarius を capitulum 外におかねばならぬが、これは前者が後者に、《Foy et Hommage》をささげていた (Varin, *loc, cit.*, note 1.) 事実と符合しない。これを《Reimsノ教会》と訳出しても、本文書をもって、ここに訳出した諸権限が capitulum を離れて、恐らくは大司教自身に移った事実を当事者双方が確認しあったものとすれば、矛盾は生じない。

(a) 《capitagium》は、ここではいわゆる《chevage》では

なさそうである。Niermeyer, ***Lexicon minus***, v° ≪*capaticum*≫, fasc. 2, p. 129. は、唯一つ ≪capaticum familie, censum videlicet quem solvunt super altare.≫を挙げる。これによれば、この capitagium は一種の「祭壇税」である。諸祭壇の収入が、殆んど capitulum のものであつた事は、前章に再三のべた。

(b) 前註(50)。

(c) 以下除外例が続く。例えば「主ノ降誕ノ日」、復活祭、ペンテコステ、その他ある種の大司教の anniversaria 等における、cena くの（即ち capitulum くの）一定額納入義務、carpentarius の任免権、thesaurarius が subthesaurarii に支払うべき俸給、裁判権（会堂内における、その全部又は一部。Varin, *loc. cit.*, note 1.）等々であり、この職も此処で名誉職化している。

(60) Varin, ***Arch. adm.***, I-2, n° CCXLVIII, pp. 746-756. Potthast, ***Regesta***, II, n° 15198. Cum super juridictione circa multa et diversa, juribus quam pluribus, et nonnullis variis articulis, racione archidiaconatus remensis questio inter vos orta fuerit et agitata diucius ; et demum, presentibus et consencientibus vobis, questio eadem per quandam ordinacionem est apud sedem apostolicam terminata, sicut in sequentibus continetur ; nos igitur vestris supplicacionibus inclinati, ordinacionem eandem quam abvertimus et intellexi-mus diligenter, gratam et ratam habentes, ipsam auctoritate apostolica confirmamus, et presentis scripti patrocinio communimus ; decernentes et precipientes eadem auctoritate, ut hujusmodi ordinacio a vobis et omnibus successoribus vestris perpetuis temporibus, immobiliter observetur. (p. 748.)

(61) ***Ibidem***, p. 749. …… et quod omnes et singuli, tam clerici quam laici, de civitate et archidiaconatu remensi, liberam eligendi sibi, pro sue voluntatis arbitrio, in omnibus et singulis causis, in judices, vel archiepiscopum remensem aut ejus officialem, vel archidiaconum remensem seu officialem ipsius, qui nunc sunt vel qui pro tempore fuerint, habeant facultatem.

(62) ***Ibidem***, p. 754. Officialis autem archidiaconi, aut taxator et receptor emendarum curie ipsius, jurent in presencia duorum clericorum archiepiscopi, quod omnia jura ipsius archiepiscopi, tam de emendis, quam de aliis, bona fide servabunt et custodient, et de hiis computacionem vel racionem fideliter reddent vel facient archiepiscopo, quod in curia sua jura ipsius archiepiscopi que tam de emendis, quam de aliis, debet ibi recipere, ipsi archiepiscopo vel alii de mandato ipsius reddet integre, sine aliqua diminucione, vel faciet sibi reddi. Et eodem modo promittat archiepiscopus, et officialis ac taxator et receptor emendarum curie sue jurent similiter, de conservandis omnibus ipsius archidiaconatus juribus et reddendis.

(a) ≪taxator≫ : Du Cange, ***Glossarium***, t. VIII, p. 41, v° ≪***Taxator***≫. に ***Aestimator*** の語があるのでかゝ記した。

(63) Varin, ***Arch. adm.***, I-2, n° CCXXX ; (30 mai 1250), p. 716-717 ; Potthast, ***Regesta***, II, n° 13986. Epistola Innocentii Pape IV ad archiepiscopum remensem, qua mandat quatinus Ottobono nepoti suo archidiaconatum remensem, cancellarie remensis loco conferat.

LES CATHEDRALES GOTHIQUES CLASSIQUES AU XIIIe SIECLE ET LEUR FOND SOCIAL

——Les cathédrales de Chartres, de Reims, et d' Amiens——

(Troisième partie)

Hiroshi MORI

Nous pouvons nous demander maintenant comment on pouvait subvenir à toutes les dépenses nécessaires à l'exécution de l'oeuvre colossale des nouvelles cathédrales. D'après un compte de la cathédrale d'Autun (1294-1295), fait par un proviseur chargé du chapitre, les recettes principales pour la réparation de la cathédrale étaient procurées par des quêtes d'aumônes et des indulgences accordées aux bienfaiteurs. A Chartres, l'évêque et les chanoines ont, comme aumône, abandonné pour les frais de l'oeuvre, leurs revenus pour une durée de trois ans. Beaucoup d'autres aumônes, non seulement de la part du roi et des vassaux de France, mais aussi des bourgeois chartrains, étaient fournies, et les pèlerins venant à Chartres ne manquaient pas d'offrir aussi aux saintes reliques leurs offrandes.

Le Concile de Lateran en 1215 promulgua l'interdiction de la quête par la procession des reliques, une des sources principales des ressources ; on devait trouver une autre façon de quêtes, que la bulle du pape Innocent IV, donné à Lyon le 21 mars 1246, indique de la manière suivante :

Lorsque les envoyés de l'église de Reims se présentaient dans une ville, on célébrait une fête solennelle, et l'on suspendait tout travail. Les quêteurs exposaient le but de leur mission aux fidèles réunis, sollicitaient leurs offrandes ; et les invitaient à former des *confréries* dont chaque membre versait une somme annuelle au profit de la cathédrale ;

les bienfaiteurs, en retour, avaient droit à une indulgence.

Les suffragants rémois s'en plaignèrent d'ailleurs, à propos de leur archevêque abusant de son pouvoir pour se procurer les sommes nécessaires aux dépenses. Cette bulle ≪Romana ecclesia≫ se rapporte en effet aux conflits concernant les ressorts judiciaires entre les prélats de Reims et leurs officialités, d'une part, et les suffragants de la province, d'autre part. Ceux-ci ont accusé l'archevêque d'avoir nommé et envoyé les quêteurs qui forçaient les sujets des suffragants à venir à la réunion et à s'organiser en confréries, en les menaçant de les citer devant les officialités rémoises. Les prélats rémois avaient ainsi pénétré dans le ressort d'autrui, jeté arbitrairement les sentences d'excommunication, et ≪extorqué≫ de l'argent au nom de l'≪emendatio≫. Les canons de la bulle réglèrent les rapports des ressorts ; les abus judiciaires s'arrêtèrent.

Etant donné que les finances de l'église de Reims étaient, en 1251, tombées dans une crise importante, nous pouvons supposer que les ressources procurées par ces moyens devaient sans doute être considérables. Les revenus judiciaires des officialités avaient été destinés aux prélats qui chargeaient les officiales, car, chacun de ceux-ci n'était responsable que de sa propre autorité, soit à l'archevêque, soit à chacun des deux archidiacres, grand et petit. La somme de ces revenus destinée aux dépenses de l'oeuvre de la cathédrale devait être versée au nom d'aumônes par la main d'une de ces autorités. Notons enfin que, depuis 1215, l'archevêque de Reims, avait lui-même monopolisé, en remplaçant le chanoine trésorier, le droit de recevoir toutes les aumônes et les offrandes.

Nous pourrions ainsi conclure qu'à Reims, et chez les autres cathédrales peut-être, ce n'était jamais le chapitre, mais les archevêques et les évêques qui étaient toujours responsables des finances de l'oeuvre de la nouvelle cathédrale.

(*à suivre*)